

タイの幼児教育

—タイと日本の保育者による協同の保育の試み—

Early childhood education in Thailand : An exploratory report on the collaboration of the childcare by the teachers of the Thai and the Japanese

高橋 順子* 首藤 敏元**
Junko TAKAHASHI Toshimoto SHUTO

キーワード：国際理解教育、幼児教育、フィールドワーク、協同、発達

1 問題と目的

今日は、国際化社会である。今後も、地球規模で解決すべきエネルギー問題、環境問題などのためにも国際化の必要性は増すと予想される。教育においても外国籍の子どもの増加、インターネットの普及により世界中の人と通信しやすくなり交流をもつなど、国際化が急速に進んでいる。学校教育の現場では、「国際理解教育」と呼ばれる多様な実践が行われている。川端・多田（1990）は、海外・帰国子女教育、異文化理解教育、グローバル教育、開発教育、平和教育、国際化に対応する教育あるいは国際教育と称する実践がどのように相違し、どのように関連していると考えよいか、またそれらを概括して国際理解教育と考えてよいかなど、教育関係者や研究者の間にも論議があると述べている。魚住（2000）は、戦後国際理解教育の諸相として、国際理解教育必要性に見る二方向性をあげている。一つは、ユネスコ創設（1946）と同時に推進されることになった「国際理解教育」（Education for International Understanding）を基盤とするもので、そこには「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中のとりでを築かなくてはならない」というユネスコ憲章の理念を軸とする国際社会レベルの要論である。もう一方は、「臨教審型国際理解教育」とでも名づけられるもので、「我が国社会の国際化を全体として推進させ」「新しい国際化に対応できる教育の実現を期することは我が国の存立と発展にかかわる重要な課題である」（臨教審第4次答申、1987年）との認識のもと、「国際社会において真に信頼される日本人を育成すること」「“世界の中の日本人”の育成を図ること」（同答申）が強調されている国内レベルのものである。さらに、情報通信技術の高度化、地球環境問題の深刻化により、世界を複合的ではあるが単一の相互依存的システムとして働く「グローバル社会」として認識した上で、国際理解教育の変容を促そうとする動きがある。「グローバルな見方」のできる責任ある「地球人・地球市民」を育てることを目標として、そこに到達するまでのねらいと内容を吟味し、具体的実施の方策が追究されている。

* 埼玉大学大学院教育学研究科目

** 埼玉大学教育学部幼児教育講座

小学校学習指導要領には、「第1章 総則 第1 教育課程の編成の一般方針」「2 前略…進んで平和的な国際社会に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする」「第1章 総則 第3 総合的学習の時間の取り扱い」「3 前略…例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。」(文部科学省, 1997a) など、国際理解教育にかかわる事項が明記されている。一方、幼稚園教育指導要領には、「第2章 ねらい及び内容 環境 2 内容」に「(11)幼稚園内外の行事において国旗に親しむ」(文部科学省, 1997b) という記述されているが、国際理解教育についての明記はない。これは、幼児期の発達段階において、身近な人々や事象に重点をおき教育実践がおこなわれているという理由と、ねらいと内容が「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の「5領域」に包括されているためと推測される。幼児教育の現場でも国際化が進み、外国籍である幼児の数は増加し、幼い頃から様々な国の人や文化に触れやすい状況にある。しかし、言葉が通じない、文化、習慣が違うなどを理由に、外国籍の幼児が十分に力を発揮できない、保育者がその子どもの文化を理解できず幼児の思いに添った援助をできない、外国籍の保護者が不安になるなどの問題も多く、異文化に触れている良さを活かさない現状もある。この現状について、植田・日浦(2004)は、記者の序で、「多くの保育者にとって外国人の子どもや親との関わりは慣れない体験であるため、どのように関わってよいのかと、とまどったり試行錯誤しながら努力している姿がみえてきます」と述べている。これは、幼児期における国際理解教育についての資料や知見が少ないからではないだろうか。また、幼児教育は、人間形成の基盤を培うものであることから、幼児期における国際理解教育は重要であると考えられる。したがって、本研究では、幼児期の発達を踏まえながら、今後の幼児期の国際理解教育への基礎的資料を得ることを目的とする。

2 方法

対象国を選択し、両国の共通点や相違点を分析するために、フィールドワークにより資料収集を行った。

(1) 対象国の選択について

問題と目的で述べたように、保育の現場が抱える問題を解決する支援となる基礎的資料を得るために、あらゆる面で日本とかかわりのあるタイ王国(以下、タイ記述する)を選択した。タイは、アジアの国として距離が近いだけでなく、古くから日本人町があり、現在では日本企業が多く、日本人学校も大規模校であったりすることから、歴史、経済、教育の面からもかかわりが多い国といえる。

タイの教育制度の基本と教育の現状は、1997年の改革より、就学前教育、6年間の初等教育課程、3年間の前期中等教育課程、3年間の後期中等教育課程、そして、4年間の高等教育課程となっており、日本とほぼ同じになっている。義務教育は、小学校と中学校の9年間で、政府が運営する義務教育は無料で行われている(財団法人 日本国際教育協会, 2003)。タイ社会は仏教なしでは考えられず、教育においても仏教の影響を色濃く受け、公教育に宗教教育が位置づけられ

ている。就学前教育においては、幼稚園の入園は自由となっている。就学前教育の整備は立ち遅れ、バンコクなどの都市部の私立の機関に限られていたが、近年、公立の機関を中心に急速に発展している（平田、1994）。2001年の就学前就学率は、72.54%である（財団法人 日本国際教育協会、2003 図表Ⅱ-2 教育段階別就学率より引用）。

(2) 手続き

タイの現地にて、日常の教育実践場面の中で3つの参与観察 (participant observation) によるフィールドワークを行った。参加観察法は、もともと異文化でのフィールドワークを主な方法とする文化人類学や都市の生態を克明な民俗誌 (エスノグラフィー) として記述していた社会学などで用いられてきた研究方法である (南、1997)。タイの現地における調査は、異文化でのフィールドワークであり、筆者はタイ文字が読めず、文献からタイの教育を理解しにくいという理由から、この方法がもっとも有効と考えた。また、佐藤・秋田 (2001) は、幼児教育におけるデュイ、フレーベル、ペスタロッチの理論のほかに、さらに新しい理論と実践を求めためイタリア現地にて教育現場を観察し、レッジョ・エミリアの幼児教育を紹介している。このことから、フィールドワークは、幼児教育の視野を広げるために有効であると考えた。実際には、「タイの大学の教育学部幼児教育の課程の講義における参与観察」「タイの幼稚園への保育を協同する参与観察」「タイの幼児教育を概観する参与的観察」を行った。

調査期間は、2005年5月～9月であった。この間、筆者 (第1著者) は、チュラロンコン大学 (Chulalongkorn University) と埼玉大学との部局間協定制による交換学生として留学をしていた。調査の場所、日数や時間など詳細は結果に記述する。

(3) 分析について

分析資料は、フィールドノート、大学の講義で配布された教材や学校要覧などの各種資料、筆者がタイの教授に提出したレポートとそれに対する教授からのコメントである。フィールドノートは、大学の講義内容、人 (筆者も含む) と状況の観察記録、保育後のミーティング時の記録を記述したものである。分析方法は、分析資料から、筆者の教職経験と共通あるいは相違している事象を抽出した。

3 結果

(1) タイ王国の大学の教育学部幼児教育の課程の授業における参与観察

この参与観察の目的は、タイの幼児教育の研究と保育者養成の実態を調査することであった。場所は、チュラロンコン大学教育学部幼児教育の課程の授業のうち4科目を受講した。期間は、2005年度の第1 Semester、回数は、各科目週1回の授業、すべての授業回数は約15回、1回の授業は3時間であった。

①記録

A. 科目名：タイの子どもの遊び (Thai Children play)

この科目は、教育学部1年生を対象として行われた。学生は約25名で、そのうち1名が男子であ

った。講義の内容は「タイの伝統的な遊び」と「乳幼児の発達にあった遊び」について主であった。前者については、実際に作っているゲストティーチャーが、本物や実践を紹介した。タイは昔から寺院を中心とするコミュニティーがあり、伝統的な遊びは、その生活と深く結びつき、竹、ヤシなど自然物を使ったものが多かった。後者については、学生が自分の気に入っている遊具を持ち寄った。多くの学生がプラスチック製の遊具を持ってきた。教授が乳幼児の発達にとってよい遊具とはどのようなものかを解説した。その後、グループで乳幼児向けの遊具を作り、なぜ、その遊具がよいかを発表した。筆者は、遊具作りには参加はしなかったが、折り紙とお手玉について紹介した。折り紙は、一枚の紙から乳幼児の発達に合わせて遊べることを話した。お手玉を紹介すると、先生が、お手玉は柔らかいので、乳児でもつかみやすく、手先を動かし、脳の発達を支えると学生たちに解説を加えた。

B. 科目名：乳幼児期の環境構成と教材のアレンジメント (Arrangement of Environment & Instructional Materials in Early Childhood)

この科目は、教育学部2年生を対象として行われた。学生は約25名で、そのうち3名が男子であった。講義の内容は、タイの幼児教育のガイドラインのテキストを用いた説明と、モンテッソーリ、レヅジョ・エミリアの実践のビデオによる紹介であった。その後、個人で、乳幼児向けの遊具を作成した。タイの幼児教育のガイドラインには、3歳までと3歳から5歳までが分けられて記述されている。乳幼児の心身の発達と評価、毎日の生活の中の学びの経験、家庭・地域社会からの支援の重要性などについて書かれている。学生が作成した遊具を発表するとき、教授は、教育学部1年生の授業と同様に、乳幼児の発達や既存している理論としてのモンテッソーリ、レヅジョ・エミリアなどとの結びつきも考慮するように解説した。

C. 科目名：幼い子供たちの数学&科学の思考能力を強化するためのカリキュラム&指導 (Curriculum & Instruction for Enhancing Math & Science Thinking Skills of Young Children)

この科目は、社会人対象の講義で、受講生は約30名、そのうち1名が男性であった。数学については、主にアメリカの州別のガイドラインについてとテキスト『Picture Mathematics』(Ed., Nigel D. Turton, 1991: Press Ace Pte Ltd, Singapore) を使った具体的な指導方法についてであった。例えば、長さを比べるときは出発点をそろえるなどである。科学については、経験を重視し、学生が様々な実験を選び、実際に行った。筆者も、もう一人の学生と協同で石鹸を用いた実験を取り上げ、異なった大きさのシャボン玉作りをした。また、日本の幼稚園では野菜を栽培し、幼児が調理し、会食する活動をしていることを紹介すると、教授から興味深いという感想があった。

D. 科目名：幼児のための教育的な経験プログラム (Organization of Educational Experience Program for Infants & Toddlers)

修士課程の学生対象として行われた。学生は筆者を含め6名で、全員女性であった。週1回の授業のほかにゲストティーチャーを招いた講義が2回とシンポジウムが1回行われた。それに加え、講義で学習したことを生かし、実際に保育現場で保育を行った。この保育については、「タイの幼稚園への保育を協同する参与観察」の部分で述べる。毎週の授業の内容は、タイの教育の歴史、ペスタロッチ、ゲゼル、ピアジェ、ブルーナー、フロイト、エリクソン、アドラー、デューイ、

スキナー、ヴィゴスキー、カール・ロジャース、フレーベルなどの理論について、及び外国語教育の方法についてであった。外国語教育の方法としての例をあげると、まず楽しく行うことが重要であるが、Car, Cup Cakeにそれぞれの絵を描き加えたカードを作るというように英語の仕組みが分かりやすい方法が良いというものであった。一人目のゲストティーチャーは、ユニセフで活動をしていた人で、ヒューマニズムについて語り、日本には「子どもの日」があり、素晴らしいと言っていた。「こいのぼり」は、子どもの人権をあらわす旗であると感じているとも言っていた。二人目のゲストティーチャーは、「脳ベースの学習 (Brain-Based Learning)」について話をした。シンポジウムは、大学構内で僧を含む3人のシンポジストにより、家庭教育の重要性について話し合われた。この中で、僧は、「心の豊かさ」を語り、経済的に豊かになった日本の子どもが精神的病にかかっていることなど例にあげた。

②分析

タイの幼児教育の研究と保育者養成の実態における共通点は、幼児教育に携わるのは、女性が多いこと、おそらく、この学生の割合は、日本とほとんど同じではないだろうか。乳幼児の心身の発達とそれにあった経験を重視する点も共通であった。既存の理論についての学習内容もほとんど共通で、それに加え、近年進歩してきた脳科学の成果を取り入れる動きも似ている。

相違点としては、学生が遊具を製作したとき、コンセプトを明確にすることが強く求められることがあげられる。コンセプトを明確にする点は、数学指導法の時も強調されていた。外国語教育においても、具体的な指導法が示されていた。さらに、海外の教育について、ヨーロッパ、アメリカ、日本に関心が向けられている。「心の教育」や道徳の内容に関することは、仏教国であるので僧が大きく関与する。

(2) タイの幼稚園での協同の保育における参与観察

この参与観察の目的は、タイの幼児の様子を知ること、及びタイと日本の保育者による協同の保育を試みることを目的とした。場所は、タイ東北地方 公立「ローイエット幼稚園」である。タイ東北地方はイサーンとよばれている。タイシルク、遺跡、イサーン料理など歴史と伝統は有名であるが、経済的には裕福でなく、出稼ぎに出る人も多い。公立「ローイエット幼稚園」は保育所、小・中学校と寺院と同じ敷地ある。地元の4、5歳児が通い、1クラス約25名で、各年齢1クラスずつ、担任1名ずつと園長1名であった。

保育の内容は、先に述べた「幼児のための教育的な経験プログラム」の実践として、筆者を含めた修士課程の学生6名が保育者となり、その指導にあたる教授とともに計画が立てられ、実践された。院生は2つのグループに分かれ、1つのグループは、他の園で「遺跡」をテーマに、もう一方は、ローイエット幼稚園2年保育5歳児の学級にて絵本『おおきなかぶ』（福音館書店、タイ語）から「土の中になる野菜」をテーマに保育を展開した。期間は8月1日（月）から5日（金）であった。幼稚園の保育時間は朝の7時から4時ごろまでであるが、学生が保育に携わったのは、主に7時30分からの1時間であった。

①記録

事前準備において、筆者の提案により、日本の子どもも好きな『おおきなかぶ』を読み聞かせることになった。教授と他の学生も野菜スープを作る料理体験に展開できるので、筆者の提案に

賛同した。(以下、学生を保育者と記述する。)

8月1日(月) 幼児が朝7時から8時ごろまでに保護者とバイクや車で登園、門のところにいる先生に合掌し、保育室に入る。所持品を自分のロッカーに置き、絵本を見たり園庭の固定遊具などで遊んだりする。8時に国歌が流れ、全員がその場で直立不動になる(合掌と国歌が流れたとき直立不動になるのはタイ人の重要なマナーである)。8時45分園庭にて朝会、9時に保育室に入り、保育者が自己紹介をする。「おはようございます」と日本語であいさつをすると真似してみようとする幼児の姿が多く見られた。教授が外国語にふれるいい機会であると助言し『おおきなかぶ』を筆者が日本語で読んだ後、もう一人の保育者がタイ語で読むことにした。「うんとこしょ、どっこいしょ」と掛け声を真似する幼児もいた。タイ語では「ファイレーファイ、ファイレーファイ」という掛け声になり、絵本と一緒に体を動かして抜く真似をする姿が見られた。その後、たまねぎやにんじんなどの野菜の絵を描く活動をした。その下に、保育者がタイ語と日本語で「たまねぎ」「にんじん」など文字で表すように指示すると、数名の幼児が、筆者が板書した文字を見て「たまねぎ」「にんじん」などと書き写していた。12時ごろ給食を食べた。教授が配膳や食後の片づけを幼児自身で出来るような環境を作るように保育者に指示した。給食が終わると、幼児数名が校内の売店に向かって走っていった。自分でお金を出し、好きなお菓子を買って食べた。1時ごろ、歯を磨き、午睡の準備をした。保育後のミーティングで、掛け声が出ていたことから幼児が活動を楽しんだ様子を筆者が取り上げると、教授は「土の中になる」という現象をもう少し明確に教えたほうがよいのではないかと助言した。午睡後、教授が言うとおりに、幼児に絵本に出てきたカブが、土の上になるのか、土の中になるのか、葉が上か、葉が下かなど質問したところいろいろな答えが返ってきた。そこで、種をまき、土の中でカブが大きくなることを話した。

8月2日(火) 登園、朝会、給食、昼寝については、毎日同様の流れなので、今後記述しない。9時20分から、紙を丸め、絵の具で色を塗り野菜作りをした。筆者が、指先を丁寧使い、紙で野菜を作る方法を幼児に教えた。紙を丸めるときの音を楽しむ幼児の姿が多く見られた。ほとんどの幼児が指先を注意深く動かし、ニンジンやサツマイモ、ジャガイモなどを作った。その後、野菜スープを明日実際に作ることを保育者が幼児に提案した。幼児に材料を聞き、保育者が書きとめ、明日に期待をもたせた。保育後のミーティングにおいて、紙を丸めるときの音を聞いたり指先を使ったりすることは、脳への刺激になるということが教授と筆者の間で共通した見解となった。次の日の保育に向けて、道具の準備を保育者で行った。そのとき、包丁の使い方について、日本の幼稚園では「左手の指先を猫の手のように丸めて材料を押さえてくるように、指導している」話すと、それはタイの幼児にも有効であると話し合われ、明日もその方法でしてみようということになった。

8月3日(水) 9時にバスで、地元の市場まで幼児と保育者で野菜スープの材料を買いにいった。バスが市場につき、幼児がバスから降り、市場に入ると地域の人々が、微笑みかけ「可愛い」と言ったり、赤ちゃんを抱いている人が近くに寄ってきたりした。幼児は、「にんじんください」「いくらですか」「まけてくれませんか」などと積極的に店の人に関わる姿が見られた。保育者から預かったお金で払い、つり銭も確かめていた。買い物が終わる園にもどり、調理を始める。昨日打ち合わせたとおり、「左手の指先を猫の手のように丸めて素材を押さえてくるように」指導すると、幼児が丁寧に材料を切っていた。出来上がった野菜スープは、給食の1品となった。食

べている途中、「とてもおいしいから、家に持って帰りたい」と言った幼児もいた。今日行った市場のこを取り上げて、明日は市場ごっこをしようと保育者が提案した。保育後のミーティングでは、市場ごっこへの活動について話し合った。筆者はお金とお財布を作ることを提案した。他の保育者も賛成した。しかし、筆者が紙を丸く切ったり、札のように四角にしたりするのはどうかと提案したのに対し、他の保育者は、作るお金は1パーツと5パーツコインにするのがよいという考えであった。これらのコインは幼児が日ごろ使っているものなので、その方が幼児に適しているという理由からである。その結果、幼児の日常生活に近い方がよいと考え、1パーツと5パーツコインを紙で作ることにした。お財布は、日本の折り紙の方法で作るのはどうかと筆者が提案したところ、賛成を得た。

8月4日(木) 昨日提案したとおり、市場ごっこへの準備をすることにした。初めに、お金を作ることにした。次に、白い紙でお財布を作った。筆者が始めに見本でお財布を作り、最初に作ったコインが実際に入るのを見ると、幼児が意欲的になった。筆者が折り方を英語と片言のタイ語で説明したにもあったにも拘わらず、教授や他の保育者が通訳したり援助したりして、お財布が出来上がった。出来上がると、ほとんどの幼児が、絵を描きくわえたり、名前を書いたり、実際にコインを入れたりして自分なりに手を加えていた。その後、買い物籠を作り、自分のなりたいお店を決め、店で売る準備をした。

8月5日(金) 市場ごっこをした。さつまいも屋、にんじん屋、たまねぎ屋、料理の本を売る店、スープ屋ができた。筆者は、2人の男児とスープ屋をした。男児2人は、スープを作ることを再現することを楽しんだ。客まで運ぶのを筆者にやってほしいということで、役割分担することにした。スープの値段は1杯1パーツで、客が5パーツ出した場合、4パーツのおつりを渡していた。市場ごっこが終わる一斉に集まり、他の保育者が各店の売り上げ、集まったコインをホワイトボードに分かり易くはり、どこの店が一番売れたかと話す。幼児と保育者で楽しかったことを喜び、活動を終わりとした。

②分析

外国語に興味を持ち、やってみようとするタイの幼児の姿は、日本の幼児にも共通する。自分で料理する楽しさやそれを味わうことの喜びも共通である。さらに、自分で作ったもので遊びたいと思うこと、楽しかったことを繰り返したいと思うことも、日本でよく見られる幼児の姿である。タイと日本の保育者が協同に保育する試みについて、互いの経験を生かすことにより、より質の高い保育へと展開することが分かった。初めは意見が違っても、幼児の姿、幼児の日ごろの生活に重点を置くことと一つの方向性が見えてくる。地域の人の様子については、筆者が日本で幼児と買い物に行ったときと似ていることが分かった。どちらの国でも、地域の人たちは、幼児を温かく受け入れている。

相違点は、お金への習慣であった。日本では幼児がお金を持つことはあまりない。幼稚園にお金をもってきて、自分でお菓子を買うなどという習慣はない。しかし、市場ごっこを通してわかるように、タイの幼児は、日常生活の中でお金と売買の認識を築いているように思われる。

(3) タイの幼児教育実践の視察における参与観察

この参与的観察は、タイの幼児教育実践を視察することにより、これまでに参与観察した成果

を補足することを目的とした。観察した園は、チュラロンコン大学の教授や知人を通じて、依頼し、許可を得て観察した。

①記録

6月14日 バンコク市内 私立「メロディ幼稚園 (Melodies Kindergarten)」

日本人のクラスとインターナショナルのクラスがある。日本人に人気のあり、日本の幼稚園と同様に給食、午後の習い事も充実している幼稚園であった。見学に行った日も、暑い日であったが、幼児が戸外でのびのびと遊ぶ姿が多く見られた。

6月23日 バンコク市内「デュアン・プラティープ財団 (The Duang Prateep Foundation)」

スラム街にある。保育だけでなく、保護者が職業をもてるような支援もしている。財団は、保育者の研修も行っており、職員は日本に来て学んでいる。給食のサンプルをケースにいれ保護者に見せるなど日本の方法を取り入れていた。タイの「先生の日」の集会をしていた。戸外にある遊具でのびのびと遊ぶ姿が多く見られた。また、初めて会う筆者にも抱っこを求める幼児もいた。

7月20日 バンコク郊外 私立「ルンガルン幼稚園 (Roong Aroon School of Dawn)」

政府の認可が出ている幼稚園から高校までの一貫教育、現在、大学も建設中である。自然物・環境にこだわる、学年を公立とは違う区切りにするなど独自の教育方法を用いている。校内の自然を利用してのびのびと学習する姿がみられた。製作などには自分のペースで集中して取り組んでいる姿が多く見られた。環境教育がしっかりしていて、校内でリサイクルした紙で机や棚を作り利用していた。保育者の研修も充実していて、海外で行う場合もある。

7月23～26日 タイ南部 クラビ 公立「チャイルドセンター」およびNPO「TUNAMIで両親を失った子どもたちのいる施設」

タイ南部はきれいな海があり、自然に恵まれ、経済的にも比較的豊かな地域である。「チャイルドセンター」には、3～5歳児の地元の子どもが通っていた。朝は2人の保育者が門で迎え入れ、合掌して保育室に入る。自然が豊かなので、幼児は果物、花、貝殻などを教材として使っていた。チュラロンコン大学の教授が、保育者への指導をしている。モンテッソーリの教具を取り入れるなど環境の工夫を試みていた。幼児自身で身の回りのことができる環境であるか、給食の中身についても、幼児の食べやすい大きさか、味付けは適切かなども教授がチェックをする。また、クラビにある「TUNAMIで両親を失った子どもたちのいる施設」にも訪れた。イギリス、日本、タイのNPOによって運営されている。幼児の安全は保障されているものの、緊張している幼児の姿が見られた。

8月26日 バンコク市内「チュラロンコン大学付属幼稚園」

3～5歳児が通う。見学した日は、3歳児のクラスで、職業についての遊びをし、学ぶ日であった。取り上げられた職業は、お菓子屋、農業、銀行、植木鉢屋、人形劇屋であった。お菓子屋では本当のお菓子が用意され、実際に食べておいしそうであった。農業は、実際にもやしを植えるものであった。担任、アシスタントの先生、そして、教職志望の大学生で保育をしていた。

9月9日 バンコク郊外「王宮の職員の子どもの通う幼稚園」

観察は降園時であった。セキュリティのために、あらかじめ迎えに来る人の顔写真を入れ、チェックしながら入るシステムになっている。

9月19～20日 カンチャナブリの公立幼稚園と小・中学校

小さな町で4、5歳児が同じ部屋で保育しているところもあった。見学した日は、3校合同同学会のようなものがあり、子どもは踊り、料理、園芸などで競っていた。行事では様々な年齢の子どもが交流していた。中学生が幼児を可愛がる姿が多く見られた。

②分析

様々な幼児教育のスタイルがあることは、日本も共通している。保育者の研修の必要を感じている点も共通している。園それぞれに特色があり、これらをまとめて分析することはできない。

筆者が経験したことがないということで相違点をあげれば、次の点を指摘できる。デュアン・プラティーブ財団のように、幼児だけでなく保護者の職業も支援すること、チュラロンコン大学付属幼稚園のごっこ遊びのようにお菓子屋さんで本物のお菓子が出ること、王宮の職員の子どもの通う幼稚園のセキュリティの仕組みなどである。

4 考察

冒頭にあげた保育現場の現状からみれば、タイと日本では大きな違いがあるのではないかと予想した。しかしながら、これらの観察を通してみると、保育現場では共通点が多く見られた。また、5日間という短い期間であったが、タイと日本の保育者が協同に保育する試みも、幼児の発達に即した展開になったと思われる。津守(2005)は、「ハヴィガーストが『人間の発達課題と教育』を書いて50年が経た。その間に時代は急激に変化した。(…中略…)それにもかかわらず、保育も教育も人間的なものを旨とするのは、世界の変わらぬ価値であり続けている。(…中略…)日本は幼児教育についても、ヨーロッパとアメリカから学んだものは多くあった。保育については、倉橋惣三によって日本の土壌にふさわしい保育が指し示されたが、それは国内でも、国外でも、いまだに十分に理解されていない。発達の課題は人間の生涯の全体にわたるから、文化、社会、過去、現在、未来、世界と日本、全体の洞察を必要とする。」と述べている。

「発達課題」という言葉には定義があるが、今はそれには触れず、「発達」という言葉をキーワードにすることが、幼児期における国際理解教育の基本となるのではないかと考える。乳幼児の発達と、既存の保育理論を有効に活用することはもちろんのこと、脳科学が進化した今日、これらにも視野を広げる必要がある。そのためには、乳幼児の発達を助長する活動や経験が不可欠であると考える。そして、国際理解教育で忘れてはならないのは、相手を受け入れようとする親和的な気持ちであろう。今回、多様な場面での観察ができ、言葉の通じない保育者同士が協同に保育できたのは、タイの方々が、親和的に筆者を受け入れてくれたことが大きな要因であったと思われる。タイ人が頻繁に使う「マイペンライ(大丈夫です)」という言葉の中に、親和的で、寛容なタイ王国の文化が現れていると思われる。

文献

- 植田都・日浦直美 2004 多文化共生社会の保育者 J. ゴンザレス・メーナ著
植田都・日浦直美 共訳 北大路書房

- 魚住忠久 2000 共生の時代を拓く国際理解教育 黎明書房 第I、II章 pp. 15-57
川端末人・多田孝志 1990 世界に子どもをひらく 創友社 第1部 pp. 12-45
佐藤学・秋田喜代美 2001 レッジョ・エミリア市の挑戦 (ビデオ) 小学館
財団法人 日本国際教育協会 2003 海外留学ハンドブック (タイ) 財団法人 日本国際教育協会留学情報センター pp. 11-12
津守眞 2005 乳幼児の発達課題と保育 保育学研究第43巻第1号 pp. 12-18
平田利文 1994 国際理解教育と教育実践 第1巻 第7章 pp. 112-124
南博文 1997 心理学マニュアル 観察法 中澤潤、大野木裕明・南博文編著 北大路書房
第1部3章 pp. 36-45
文部科学省 1997a 小学校学習指導要領
文部科学省 1997b 幼稚園教育要領解説

Early childhood education in Thailand:
An exploratory report on the collaboration of the childcare
by the teachers of the Thai and the Japanese

Junko TAKAHASHI Toshimoto SHUTO

Three participant observations were performed to understand the early childhood education in Thailand and collect the fundamental materials of the international understanding education of infancy. In the participant observation in the collaboration of the childcare by the teachers of the Thai and the Japanese, it was found that the experience which is suitable for the infant's development can be provided and the quality of the childcare rises through the collaboration. On the theory and method of early childhood education, both of the similarity and the difference were found between Thailand and Japan. In Thailand, emphasis was placed on making how to relate the teaching method to the brain science and promoting children's social adjustment rather than playful activities in make-believe play situations. These results are useful for planning the international understanding education in the Japanese kindergarten.

Keyword: International understanding education, early childhood education, fieldwork, collaboration, development

謝辞

本文を書くのにあたり、4ヶ月という短期間で、多くの体験と情報を得ることが出来ましたのは、非常に多くの方々に、ご指導、ご支援をいただいたおかげです。

タイ王国現地におきましては、チュラロンコン大学 (Chulalongkorn University)、Dr. Urairat

Sunreungwong, Dr. Cheerapan Bhulpat、Dr. Worawan Hemchayart, Dr. Suganya Karnjanakit, Dr. Pattamasiri Teeranurak, Dr. Oracha, Dr. Boosong Tantiwong, Dr. Udomluck Kulapichitr, Dr. Duangduen Dunuam には、タイの学生と同様にご指導いただきましたことに感謝いたします。チュラロンコン大学留学生センター (Office of International Affair Chulalongkorn University) の方々には、事務手続きを始め、週3回のタイ語クラスを開いていただき、生活に必要なタイ語が話せるようになりました。学生の皆さんには、授業を英語に訳してくれるなどお世話になりました。特に、修士課程の院生の方々には、講義中、ローリエットで9日間の宿泊などいろいろな場面で助けていただきました。クラビ(Krabi)政府、ローリエット(Ro-et)政府の方を始め、現地の先生方と園児の皆さん温かく迎え入れてくださりありがとうございました。塚原貴久美さん、加藤真紀子さんとご主人のウイロートさん、高田豪さんと朋子さん、Ms. Nichakorn Budsakornには、幼稚園の観察のための手配をしていただいたり、タイの文化・生活についていろいろと教えていただいたりしました。メロディ幼稚園、デュアン・プラティープ財団、ルンガルン幼稚園、チュラロンコン大学附属幼稚園、王宮の職員の子どもの通う幼稚園の園長先生と職員の皆様、快く観察を受け入れてくださいました。Ms. Jinnapat Posrithongとご主人様には、カンチャナブリの公立幼稚園、小・中学校に案内していただきました。現地での生活を大変、有意義にくださったことに心よりお礼を申し上げます。

日本国内におきましては、タイ王国大使館公使参事官Mr. Singtong Lapisatepun、工業公使参事官補佐Mr. Kantatorn Wannawasu, 山下雅史さん、学芸大学附属高等学校の室田敏夫先生には、出発前と帰国後にタイの文化を理解するためにご助言をいただきました。心強いお力添えをいただいたことに厚く感謝致します。

最後になりますが、埼玉大学留学生センターの方には、事務手続き、タイ現地との連絡では大変世話になりありがとうございました。学生後援会からは、渡航費の一部を支給していただきましたことに感謝いたします。